掲示板

研究会・研修会等への報告者・講師の派遣

（平成十二年一月～三月）

○幕別町農業フォーラム・基調講演

主　催　まくべつ農村アカデミー

と　き　平成12年1月13日

テーマ　「地域農業をみつめる―新たなる幕開け―」

講演者　七戸　長生（当研究所・所長）

○第3回北海道合鴨フォーラム

主　催　北海道合鴨水稲会

と　き　平成12年1月30日

テーマ　有機農業の進むべき方向を考える

『有機農業と有機農産物の認証制度』

講演者　酒井　徹（当研究所・専任研究員）

＊パネルディスカッションのパネラーを兼ねる

○JAめむろ町総代会・研修

主　催　JAめむろ町

と　き　平成12年2月18日

テーマ　「新しい時代に即応した農協組織のあり方、組合員のあり方」

講演者　七戸　長生（当研究所・所長）

○有機・自然農法を考える公開講演会

主　催　江別有機・自然農法研究会設立準備委員会

テーマ　「有機農業のこれから　国の有機農産物登録認証制度と生産者の対応」

講演者　酒井　徹（当研究所・専任研究員）

○平成十一年度農業付加価値体験発表会・基調報告

主　催　北海道農業会議

と　き　平成12年3月14日

テーマ　「付加価値農業と農村女性の役割」

講演者　冨田　義昭（当研究所・研究顧問）

○平成十一年度農業農村整備技術強化対策事業一般研修会

主　催　北海道土地改良事業団体連合会

と　き　平成12年3月15日

テーマ　「地域農業振興方策」

講演者　佐伯　憲司（当研究所・常務理事）

○技術士有資格者増強など説明会―技術士資格取得講習会―

主　催　（財）北農会・農業技術コンサルティングセンター

と　き　平成12年3月15日

テーマ　「最近における農業部門の分野別出題傾向と受験対策などについて」

分担講義　冨田　義昭（当研究所・研究顧問）

お知らせ

◆　参考資料の紹介

北海道農業会議は、去る三月十四日、札幌市において「平成十一年度農業付加価値体験発表会」を開催しましたが、当研究所の冨田研究顧問が「付加価値農業と農村女性の役割」と題して基調報告を行いました。他に「北方農業」に掲載された農業付加価値体験で、特色ある事例が三人の方からそれぞれ発表されました。主催者が当初予想した人数をはるかに上回る一三〇人の参加で、関心の強さが窺われました。特に、農村の女性グループのお世話や指導を担っている農業改良普及事業関係の方達が多く参加され、その外に付加価値農業を実際に手掛けている方々などが熱心に受講されました。

当日の出席者へのアンケート調査結果からは、「大変参考になった。次年度も発表会を是非とも継続して欲しい」女性グループの育成・起業化について、指導的立場の方々、実際に付加価値農業を行っている方々の産みの喜び、悩み苦しみなどが伝わりました。当日の資料はほとんど在庫がなく、後で欲しいという希望者の配付に応じられない状況にあります。

そのため、北海道農業会議の了承のもとに、当研究所では、冨田研究顧問が基調報告した要旨と、「北方農業」に連載の「農業の付加価値戦略」の中で、これまで三回の分担執筆をした「女性を主体にした活動」を、資料として収録しました。ご希望の方には実費で頒布いたしますので、次によりお申し込み下さい。

◎資料名「付加価値農業と農村女性の役割、活動の事例集」

▼内　容

一、農業付加価値体験発表会・基調報告の要旨

・付加価値の定義、関連用語の意味、付加価値農業の範囲

・農業・農村の三つの価値と農村女性の役割

・農業・農村女性の活動における幾つかの方向性

・付加価値農業に対する疑問や懸念について考える

二、女性主体の活動事例集

・「女性グループ主体の起業化活動・・あくなき女性の探究心・・」（洞爺村の事例）

・「女性による『まめっこ倶楽部』などの活動・・食卓にもっと豆料理を、の願いを込めて・・」（本別町の事例）

・「地場産品研究センターを核とした、女性中心による『手づくりチーズ』の活動」（大樹町の事例）

▼体　裁

A五版　三六頁

▼頒布価格

一冊　一、〇〇〇円（送料・税込み）

▼申し込み先

（社）北海道地域農業研究所

〒〇六〇―〇〇〇四

札幌市中央区北四条西七丁目

JA厚生連別館五階

電話　〇一一（二八一）二五六六

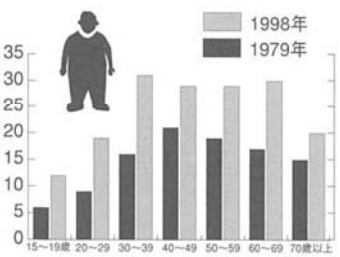
FAX　〇一一（二八一）二七〇七

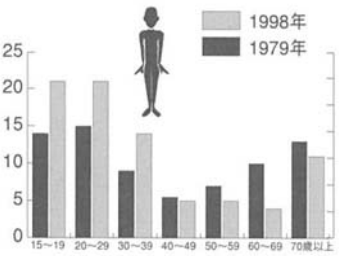
編集後記

◆二月二十六日北海道新聞朝刊の一面に二、三〇〇万人が肥満という記事が出たのをご記憶の方もいらっしゃるかも知れない。これは厚生省がまとめた一九九八年国民栄養調査の分析結果として報道されたものだが、日頃統計数字をいじっているものとして興味深かった。

まず肥満の判断基準だが、体重を身長で割った数字（BMY値）で二五以上を肥満としている。逆に一八・五以下をやせとしている。この基準の取り方が統計のマジックとなり得る。

またこのグラフから、男性は三〇代から六〇代までそれぞれ三割前後が肥満で二〇代三〇代の肥満がほぼ倍増したと説明している。逆に女性の場合は、一〇代二〇代は五人に一人が「やせ」で、七九年調査の数字と比べても「やせ」の割合





が増加していると説明されている。

そういわれればそうだと思う反面、男の子でもやせてふにゃふにゃしたのが多いと思うが、その数字は載せられていない。昔は、いわゆる中肉中背が多かったのではないかと思うけれどそのことはグラフからは判らない。確かにグラフは説明を補足し説得力を持つが、別の角度からの分析をするためには役に立たないことがある。かといってただデータを数字で表したのでは、ハナから興味を持ってもらえない。ここが難しいところである。

また分析者の主観の要素も重要である。例えば先ほどの、昔はいわゆる中肉中背が多かったのではないか、それが最近はやせも肥満も含めて日本人の体型はバラエティーに富んできたということで数字を整理し直すことも出来るかも知れない。

統計を扱うものとして、その客観性と、数字の中から動きを見いだす目を、いつも心がけていることの大切さを感じた。

◈植物に関心のある人たちの間で、去年は西洋タンポポではなくて、日本古来のタンポポがえらく目についたという話がある。

そういえば数年前に話題になった帰化植物だが、私の馬を預けている牧場の馬場の縁にびっしり生えていたセイダカアワダチソウがいつの間にか消えてしまった。主人に似て、何でもよく食べる私の愛馬でさえこの草だけは見向きもしなかったのに、何で消えてしまったのか原因は全く分からない。そういえば、これらの帰化植物は道路や鉄道の沿線にはよく繁茂するが、森の真ん中まで進出したということも聞いたことがない。

私は盆栽が好きで、若い頃から皆に年寄り臭いとひんしゅくを買いながら続けているが、これの席飾りに使う地板（盆栽鉢を乗せる板）にはよくナラやタモと言った木のこぶを用いる。冬になると、このこぶ探しに山の中をふらふらしたものだが、このこぶもどこでも有るというわけではなく、森の境界部分や川の沿線の古い木にくっついている。鬱蒼とした森の真ん中にはない。

はっきりした学問的な裏付けがある訳ではないが、多分、木はお互いに何らかの抵抗物質のようなものを出し合って、異物を排除しあっているのではないか。それで川は風の通り道とも言われているが、そうしたところや森の境界は、片側が外界にさらされて癌のようなこぶが出来たり、帰化植物に浸食されたりするのではないか。

私たちの知らない自然の回復力やバランスを取る力、そういった自然の営みに感心させられる。

DATA FILE

関連事項／DATA

ホクレン農業協同組合連合会
〒 060-8651
札幌市中央区北４条西１丁目３番地
☎ 011(232)6108　広報宣伝課

北海道大学　農学部
〒 060-8589
札幌市北区北９条西９丁目
☎ 011(716)2111

北海道農業機械工業会
〒 060-0002
札幌市中央区北２条西２丁目
☎ 011(251)7743 札幌三博ビル

JA 北海道中央会
〒 060-8651
札幌市中央区北４条西１丁目３番地
☎ 011(232)6411

たすけあいワーカーズ　むく
〒 003-0838
札幌市白石区北郷８条８丁目７－４
☎ 011(875)6914